

令和 2 年 5 月 6 日現在

機関番号：34523

研究種目：若手研究(A)

研究期間：2017～2019

課題番号：17H04723

研究課題名(和文)金門島を核とする移民集落の越境的空間特性と住文化の重層性

研究課題名(英文)Transboundary spatial characteristics and multilayered dwelling culture of communities of Chinese migrating from Kinmen Island as a relay point

研究代表者

長野 真紀(Nagano, Maki)

神戸芸術工科大学・芸術工学研究科・助教

研究者番号：10549679

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：金門島に現存する143集落を対象に、居住者の姓氏、出身地、島内・島外の移住先、空間の方位性、空間規模、立地特性についてまとめ、空間概念図の作成を通して移民送出地(母村)の居住環境分析を行った。また、合院式住居、洋樓、街屋の実測と文献調査を通して、金門島における住居の典型事例を採集した。

移住によって新しい居住地となったシンガポールおよびマレーシアでは、華人が居住する住まいの悉皆調査を通して、shop house、平屋、木造住居の住様式を読み取り、差異性と共通性について分析した。3地域での実測・聞き取り・参与観察を通して、歴史的な人の移動の歴史、居住空間の変遷、現地の生活文化が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで捨象されてきた国家間の空間的近接性、国境・境界の問題を対象とし、調査研究が進んでいない境界地域のミクロな生活圏を明らかにした点に学術的意義を持つ。居住環境が持続する普遍的な仕組みは、住まい手や空間、自然環境に無理なく対応できるユニバーサルなデザイン文化が集積していると考えられる。その持続性の調査・分析は、国や地域を超えたこれからの住まい方を考えていくための研究として社会的意義を持つ。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on 143 existing settlements on Kinmen Island. This study summarizes the surname, origin, on- and off-island migration destinations, spatial orientation, spatial scale, and location characteristics of the residents. Then, a spatial conceptual diagram was prepared and the living environment analysis of the home village was carried out. I conducted a survey of classical - style building, western-style building and town-house, as well as a literature survey, and collected typical examples of dwellings on Kinmen Island.

In Singapore and Malaysia, we conducted an exhaustive survey of Chinese residences. In the area, the housing styles of shop house, single-story house and wooden house were read and analyzed for differences and commonalities. Through actual measurements, interviews, and participatory observations, the history of historical human migration, changes in living space, and local living culture were revealed.

研究分野：住環境計画

キーワード：金門島 越境 住文化 華人居住地 境界

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

(1) 金門島は近世以来、海外移民を送り出す郷村（僑郷）であった。福建省の漳州・廈門などから移り住んだ人々によって宗族的つながりを持った百数十の強い単性村で構成され、金門社会での一定の生活を経て、郷村単位で海外に移住していくことが多かった。一方、台湾本島には金門から移住してきた閩南系の人々も多いが、客家の移住や日本統治の50年間で居住文化の融合が進んだ。中国では、文化大革命によって寺院や歴史ある空間が大きな被害を受け、現在も伝統的建造物の建替えが急速なスピードで進み、歴史的空間を持った都市や集落が更新・消滅している。このような状況の中で、金門島は多様なアジアの文化を取り入れながらも、現在まで伝統的閩南空間を色濃く残している。また、単性村の継承や宗族の繋がりを軸にした周辺諸国への移住を通して、東・東南アジアとの地域間ネットワークが交差・融合している。金門島を核として、これまで継続的に研究してきた台湾（客家、福佬客、原住民）や八重山（福佬人）の居住環境、集落特性を比較分類しながら、新たな研究対象地として移住先のシンガポールとマレーシアを捉え、地域の空間的・文化的相互関係を読み解いていくことができれば、地理的条件で分かれている東・東南アジア諸国の境界域を超えた住まいの原理を明らかにすることができるのではないかと考えるに至った。

2. 研究の目的

(1) 金門島は東アジアにおいて極めて特徴的な歴史世界を形成し、他の周辺地域との深い関わりを持つ開かれた環境下において、アジアの中のハブ的拠点として位置づけられてきた。金門島を一つの地域とみなし、移住先との相関性や共通性を掘り下げることにより、歴史的な人の移動によって生まれた居住環境の越境性を考察し、周辺族群や地域との関係性の中で構築されてきた住文化の重層性を明らかにしていくことを目的とする。

(2) これまでの既往研究・予備調査の成果をもとに、本研究では、中国福建省金門島における島内移動・島外移動の歴史的経緯と集落を構成している①環境要素（立地選定、土地利用、方位軸）、②建築要素（住居の形態、規模、住み分け）、③文化要素（風俗習慣、生活様式、祭事）の解明を通して、島嶼における居住空間の固有性について分析を進める。そして、金門島を核とした移住先のシンガポール、マレーシアとの空間特性比較から民族・地域環境・生活文化との関係性を明確にし、東・東南アジアにおける居住空間の歴史的変遷と共通性を見出し、人の移動によって生まれた居住環境の越境性はどのように継承されていくのかを明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 3年間の研究期間中に文献調査、現地調査（聞き取り・実測・参与観察）を主軸として、3つの項目について明らかにする。海外調査を主とするため、現地の研究者の協力は不可欠であり、これまでの東アジア研究でつながりのある研究機関および個人研究者と連携をとりながら進めていく。

①金門島の集落分布と居住環境の類型化

現存する全集落を対象に、移住地および島内の移住先を年代別に捉えて分布図を作成し、衛星映像図から集落規模と土地利用の分類を試み、島内の居住環境を類型化する。また、金門島を拠点とする東・東南アジアへの移住先をまとめ、空間特性と合わせて全集落のデータベースを作成する。島内外の移住地および空間類型化された集落の中から特徴的な場所を確認し、各項目の中の代表事例集落を選定する

②住居の空間構成と地域特性の考察

生活調査を通して、生活文化や歴史的慣習、居住空間の使い方を明らかにし、民族性や文化性が空間、形態、住まい方に与える影響を考察する。また、島外移住先である華人居住区の住まいを対象に、金門島とマレー文化が融合した建築・居住空間・周辺環境の特性を調査する。

③住まいと生活の分化に見る空間領域の分析

日常の暮らしにおけるミクロな空間スケールを考現学の視点から観察し、公的領域、私的領域、機能領域の3つの空間から生活行為と住まいの関係について明らかにする。民族性、地域性、環境性などの多様な条件を受け、生活空間や生活文化がどのような特色を有するようになったのか、居住者への聞き取り調査を軸に分析する。

4. 研究成果

(1) 島内の環境を把握するため25,000分の1の地形模型を作製し、水系・道路・土地の高低差について理解を深めた。既往研究から、宋・元・明・清代の集落分布を確認し、歴史的な人の往来と土地利用についてまとめた。また、国家公園としての位置付け、集落用地の種類、住居形式と空間の広がり方に関する既往研究をまとめ、地名から居住環境を読み直す作業から、凹凸地形、水系、平地、傾斜地などの詳細な立地が明らかとなった。

文献資料と衛星画像図を用いて集落の立地場所と規模を確認し、現地で伝統的集落、廃村、新村について調査し、現存する143の伝統的集落を明らかにした。伝統的建築物の保存状態の確

認と現況写真（写真1）を撮影し、居住者の主要姓氏、出身地、島内・島外への再移住先の情報と合わせて、居住域・生産域・住居の方位性を読みながら各集落の空間概念図（図1）を作成し、データベースとしてまとめた。この中から、①建物の保存状態がよく、②集落構造の大きな改変が行われておらず、③観光地化が進んでいない閩南様式の伝統的集落構造が残る集落を典型事例に設定し、集落の空間構造、住居配置、住居入口、方位軸を調査した。住居（四合院、洋樓）の実測および現在の生活環境、室内空間の使い方に関する聞き取りを進め、コミュニティ空間や水場の分布など、個と全体の関係性についてまとめた。居住者への聞き取りを通して、住居修復の規制、再建資金の補助制度、南洋移住者の土地所有状況が明らかとなった。金門島とマレー半島、台湾本島にも数多く現存する街屋形式の住居に関しては、これまで膨大な研究が蓄積されている。これらの資料から地域ごとの特性を明らかにし、比較・分析する際の資料としてまとめた。金門島からの移住先には台湾澎湖諸島も一地域として含まれており、空間変遷の流れを理解するため同じ閩南伝統建築を有する集落について補足的に調査した。



写真1. 事例 No. 74 山外集落（撮影：2018.3）

(2) マレーシア・マラッカでは、ヨーロッパ列強の国々に支配された影響と、東西貿易の中継点として類稀な文化が形成された折衷文化や建築様式、文化的な町並みを構成している古都の空間構成把握を目的に調査を進めた。旧市街世界遺産保存地区に現存する shop house（街屋型店舗併用住宅）のファサードデザインから建築年代を9分類し、建物の装飾物から住居に込められた中国の伝統的思想を読み取った。動植物レリーフや縁起の良い文字の組合せが多く、家運安泰や吉祥など、風雅を祝福したものが多数を占め、中華系移民が経済的実権を握った1840～1950年代の様式に顕著に見られた。建物の用途分類から旧市街を4区域（伝統的建築区域、観光区域、居住区域、商業区域）に分け、2008年世界遺産指定後の現状把握を行った結果、事業所数の増加に伴い建物の文化財としての修景水準の低さが明らかになった。1966年施行の家賃統制令が2000年に撤廃されたことにより、建物更新の抑制が失われている。また、居住区域に位置する建物の内部実測・聞き取り調査を行い、居住者（中華系、インド系、欧米系）によって異なる住まい方と空間の使い方を見ることができた。現地の住空間を理解するため、世界遺産保存地区に隣接するマレー集落で高床式住居を見学・実測した。

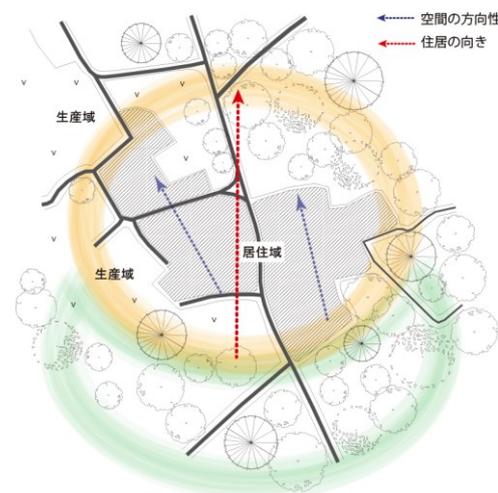


図1. 事例 No. 9 東堡集落空間概念図

(3) マレーシア・ペナンでは、中華系居住地の shop house を実測し、空間の使われ方と生活習慣について調査した。マラッカは400年以上にわたりポルトガル、オランダ、イギリス、ヨーロッパの列強国に支配され、独自の文化を形成してきたが、ペナンは1700年代後半にイギリスの植民地として割譲された歴史を持つ。マレーの慣習と多様な文化の融合により、中華系移民の住まいはどのような影響を受けたのか、両都市の比較から空間構築の過程を整理した。さらに、世界遺産保存地区に位置する中華系移民の水上集落を対象に、移住の歴史的経緯と住まいの空間特性についてまとめた。特異な環境下で暮らす彼らの生活には、マレーと中華が融合された住様式が取り入れられ、新しい住まいの型が構築されていた。母村と同じ‘一族居住’を継承し、風水思想や共有空間など陸地の生活との共通性を見ることができた。

(4) シンガポールの都市開発初期には、居住区の中で民族ごとに住むエリアが区別されていた。本研究ではダウンタウンコアの華人居住区を対象を絞り、約1,500軒の shop house の外観調査を実施した。さらに詳細な空間様式を明らかにするため、華人居住区の Blair Plain 地区を対象に住まい方の変容を捉えた。URA_都市再開発庁の資料を参考として、当時の都市計画図および住宅図面と現在の図面を比較しながら、ファサードデザイン、間取り、初期居住者の出身地について分類した。また、保全地区の建築に関するデザインマネジメントを整理し、シンガポールにおける中華系移民の住居デザインの特性についてまとめた。現在、国立図書館アーカイブ資料から当初の仮説が一部覆る内容が見つかり、調査結果の再分析を進めている。また都市の一部と離島に現存する kampong でマレーの住まいを調査すると同時に、そこに居住している中華系移民の住まいを実測した。中華系の建築様式は平屋で、A: 中心軸を持った左右

対称の合院式住居に類似した空間、B:通路・居室を兼ねた空間が片側に配置され、奥へと続く街屋型の空間、という2種類が見られた。一方、マレーの住居は左右非対称で、住居内部には男女の領域を分けた多数の高低差があり、中華系住居との共通性は見られなかった。

(5) 移民送出の地一母村である金門島を核とし、新たな移住先となったマレー半島を対象に、居住環境の分析をすすめてきた。金門島では集落の立地・周辺環境・建物配置などの広域レベルと、住居の間取り・生活習慣・家族構成などの狭域レベルに対象を分けて調査を行った。その結果、集落規模に関わらず単姓村が多くを占め、密集型の集落形態をとりながら一あるいは二方向への方位軸を持っていることが明らかになった。住居は中心軸を持つ合院式で庭を居室が囲み、奥へ進むにつれて空間の私的性が増す。空間は奥へ増殖していくのが一般的で、縦軸が強く、基本形式、増築形式、その他形式を含めて11種類に分類できる。

洋樓はファサードに南洋デザインを取り入れているが、内部の平面構成は合院式住居と類似した空間であることが明らかになった。街屋は他の東・東南アジアにも広く普及する住居様式であるため、更なる比較分析資料が必要となるが、合院式に通じる空間構成も随所で見られ、居室の使い方、中庭や聖域の位置など今後の分析資料として扱っていく。

マレーシア、シンガポールの華人の住まいはshop houseが最も多い。植民地都市では労働者や移民を受け入れるため都市計画において大量に建設された歴史を持ち、17世紀中頃から20世紀後半に至るまでに多様な様式が生まれた。実測できた住居はすべて現在の生活様式に合わせて一部改装された空間が随所に見られ、博物館などの保存された建物によって地域別の原型を確認することができた(写真2)。

Kampongの住まいは、土地の制約や住居入口の位置により街屋型と合院型の二種類に分けることができる。shop houseやマレーの住居に比べて小規模で、各居室が独立して中庭は持たない。水上住居は街屋型のように細長い住居様式で、正面入り口と背面の海からの2方向入口を持つ。間口は狭く奥に長い空間で、中庭は持たないが海面に面したデッキがshop houseの‘後院’と類似した空間機能を持つ。

現在も一部、研究結果の分析を続けているが、3年間の成果がまとめ次第、国内外で研究発表をすすめていく。



写真2. 金門島、シンガポール、マレーシアにおける街屋形式の住居と街並み(撮影:2017.11,12/2018.2)
(左:金門島 番仔樓/中:シンガポール shop house/右:マラッカ shop house)

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 鈴木徹、渡辺麻友子、長野真紀
2. 発表標題 プラナカン建築に見るデザイン様式の融合性 - マレーシア・マラッカ旧市街世界遺産保存地区を事例に
3. 学会等名 芸術工学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 渡辺麻友子、鈴木徹、長野真紀
2. 発表標題 装身具のモチーフから見るプラナカン女性の伝統的デザイン - マラッカにおけるアクセサリーとサンダルを事例に
3. 学会等名 芸術工学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

ホームページ等 https://kobe-du.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=251&item_no=1&page_id=13&block_id=30 https://kobe-du.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=272&item_no=1&page_id=13&block_id=30

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考